

大川周明と進行麻痺

金川 英雄

東京武蔵野病院／昭和大学精神科

大川周明（おおかわ しゅうめい、1886年12月6日～1957年12月24日）は、戦前活躍した思想家である。理論とその言動から第二次世界大戦後、東京裁判28人のA級戦犯、民間人としては唯一起訴され、東京裁判に出廷した。

水色のパジャマ、素足に下駄で出廷し、パジャマを脱ぎ始めた等、奇異な行動があった。開廷初日1946年5月3日に首相であった東条英機の頭を二度叩いた。翌5月4日法廷で「インド人は来たれ、ほかは去れ」ドイツ語で言い、そのまま米陸軍病院に連れて行かれ、精神病と診断され松沢病院に入院したが、その後免訴となった。

退院が俗に言う「東京裁判」終了後であったため長い間、詐病、軍事裁判に引き出された反応説などが流布し、現在でもそのような雑誌が出版されている。しかも松沢病院入院中、コーラン全文の翻訳を完成したのも、疑惑を招くきっかけになっている。鑑定した内村裕之は「進行性麻痺」とはっきり明言している。

「大川周明関係文書」は1998年大川周明関係文書刊行会が編纂した。著作論文72編、書簡724通、来簡399通が掲載されている。その書簡を調査分析し、精神医学的に内容を考察した。

発症の時期を考えてみる。巣鴨に入る前に奇妙な高揚感があり「戦争犯罪人として入所」する手紙を方々に出したり、日記の内容は躁的である。1945年11月14日までの手紙は破綻がない。11月24日の手紙の最後は、やや奇妙である。

「米の科学的能率主義その組織性を摂取し、彼等に迫りき超越す覚悟を以て精進する国民的前衛の全国的組織を準備する必要有之候。小生の同志には既に此事を勧めそれぞれの方面において実行に着手せしめ居候」

笹川良一「巣鴨の表情」、児玉誉士夫「運命の門」にも大川の子精神変調の記載がある。

1946年9月18日の手紙「私に些事を指摘されてより毎夜甚だしきは三回も麻酔剤を注射し、私をして一切を忘却せしめるため医員・看護婦こぞりて馬鹿な注射を続け申し候。ただ発熱最高度に達せる時（略）英国王エドワード七世の姿明らかに私の前に現れ、『かねあき』頑張れと大声疾呼せられ、『さあ生まれ変われ』と鼓舞されそのために異常の高熱に堪えたるのみならず、身長も一寸五分のび、身体柔軟なること青年の如く」独語のように脈絡なく文面は続く。

1951年1月6日には新宿下落合の内村裕之が書いた本人からの年賀状の返書が載っている。これは入院していた患者が院長に年賀状を出し、返事が届いた稀有な例である。

「二年に亘る索漠たる病院生活がかくの如き結実の機会でありし事は小生にとりても感慨であります（略）おそらくかの病院にとりてもレコード破りのことでありませう」

全快したと思われる理由の一つは1947年2月17日から、1948年12月11日まで1年8ヶ月かかり、コーランを翻訳したことである。ただしこれは漢訳、英仏独の諸訳本を参照してでき上がった物である。1957年12月24日、71歳自宅で亡くなった。

【結論と考察】 1) 書簡から1945年11月14日から24日の間に症状は悪化。2) 1946年9月には精神症状は活発、マラリア療法が行われ手紙にも反映されている。3) 遅くとも1946年12月9日には症状は改善した。4) 1951年の正月には内村元院長も全快を認めた。